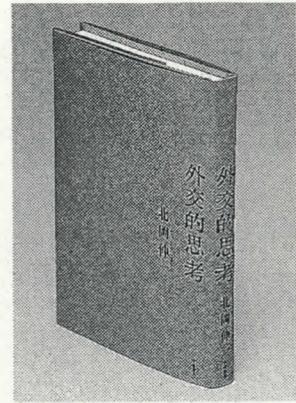


## 外交的思考



(千倉書房・1890円)

## 当たり前前の主張の価値

『外交的思考』という表題は想像の翼をはばたかせ、読者は、内政とは異なる外交独自の思考に思いを馳せるかもしれないし、国連次席大使を経験した東大教授という著者の肩書から、交渉術の極意を期待するかもしれない。しかし、エッセイ集ということもあるが、本書の内容は驚くほど「当たり前前の主張」である。外交は一般庶民の生活からは馴染みが薄いと思われるがちであるが、他者を尊重し、規範を遵守するという一般的な価値が常に求められている。歴史問題や集団的自衛権、国連安保理改革など専門的な問題も登場するが、本書に通底しているのは「国際社会において追求されるべき価値は何か」という至って普通の問いである。

きたおか・しんいち 東京  
大大学院法学政治学研究科  
教授。1948年奈良県生まれ。

無論、専門家にとつての「正解」と普通の人々の「常識」は必ずしも同じではない。東日本大震災とその後、の原発騒動によって、私たちはそのことを思い知らされた。外交もまた例外ではない。国際平和と多国間協調の世界で、外交の公開と民主化を叫ぶ世論―外交は専門的外交官たちの密室の会議ではなく、国民に広く公開されなければならないという声―は日増しに強くなっている。もちろん、外交交渉のすべてを公開することは困難であると、「専門家」は反論する。

しかし、両者は果たして相容れないのだろうか。TBSドラマ『運命の人』は、外務省の「秘密主義」とジャーナリズムの「知る権利」を見事に対比しているが、この劇画的な脚本の真の教訓は、誰かと秘密を共有するためには相手から信頼されていなければならないという素朴な真理である。つまり、外交官に求められる資質とは、語学力でも、国際法や国際関係についての博識でも、もちろん嘘をつく能力でもなく、相手の信頼を獲得する誠実さである。

本書には、「平和と復興は清掃から」―自分の町をきれいにしようと思つことが平和や復興の出発点となる―という一節がある。これを理想論として嘲笑うことは容易い。しかし理屈を超えた共感と信頼が、時として人を動かす原動力となることは忘れてはならない。

(九州大准教授・政治学 大賀哲)